

無風の日も 白波が立つ日も ヨット乗り人生をどこまでも



チーム「アポロニア」のメンバーとは、長崎名物のちゃんぽんを食べよう!と、島原半島に接岸し出前をとったこともあるそう。



ハウステンボスカップ会場への回航は片道15時間。夜には満天の星が波の上に輝き、海と空の境界線を見失うほど美しいという。 ※堺氏提供



ヨットシーズンの始めと終わりの年2回、愛艇を陸に揚げ、船底の手入れや塗装を行う。同世代のメンバーはともに働き盛りで子育て期。片付けも息びったり。

一級建築士事務所堺武治建築事務所

堺武治さん「48歳」

取材・撮影／坂口紀美子

陸にはない、非日常の心地よさ

昔からヨーロッパの貴族に人気のマリンスポーツ、ヨット。今夏のリオ五輪で女子セーリングが3大会ぶりに入賞を果たしたとはいえ、まだまだ海の上ならぬ雲の上のスポーツだ。熊本市の建築家堺武治さんは、自身のサイトに「趣味・ヨットレース」と記すヨット乗り。その魅力をうかがいに、「趣味・ヨットレース」号に同乗させていただいた。

朝。熊本・波多マリナを出港し、世界文化遺産に登録された三角西港を眺めつつ、天草五橋のひとつ天門橋をくぐって島原湾へ。洋上でメインセールとジブセールの揚げ、エンジンを切ると、音と振動が止んで波と風の音だけが耳に入ってくる。ポフッと息を吹き出すように帆が風を捕らえ、船はまるで滑るように進んでいく。すっかり仕事を忘れ、船首に立って風を浴びていると、「陸の上では体感できない癒しを、知ってしまいましたね：」堺さんが笑う。

学生時代の堺さんに海との縁はない。進学先の神奈川から熊本まで愛車のハチロク(トヨタAE86)で帰省するほどの車好きで、建築家として独立を考えていた29歳のころ、行きつけの店で親しくなった人からヨットに誘われた。初めてのク

ルージングが「超々!」楽しくて、「メカ好きの血も騒ぎ迷わず船舶免許を取得。取材日も乗船してくれた平金さん、黒田さんら同世代の4人でチームを組み、その5年後には西日本最大のヨットレース「ハウステンボスカップ」に出場した。当時、まだ「彼女」だった妻の牧さんに乗せて数々のレースに挑み、時には3人の子どものともクルージングを楽しんだ。「一緒に風や潮目をよんで、舵を切って。家族の思い出にはいつもヨットがあるんです」

ヨットとも建て主とも、 長い一生のおつきあい

ところが最近、小・中学生に成長した子どもの行事も忙しくご無沙汰。さらに今年4月に発生した熊本地震で自宅が損壊、メンバーそれぞれにも影響があり、今年のレースは参加を断念した。以降の予定も決まっていないう。さぞ気が焦るのではと水に向けて、「ヨット人生の通過点のひとつかなと思っています」と堺さん。震災後、これまで設計した建物を見てまわり、支障がなかったことを確認して安堵した一方、人生には思いがけないことが起こると実感した。「ヨットでの楽しみも、スイスイ順調に進む安定期、ピタリと風が止んで動かない漂流期、のどを潤しながら友と語り合う屋形船期とさまざま。建て主と家づくりの後も一生のおつきあいをするように、海とも長く深く関わっていききたい。海に出るために今、陸をがんばろうと思うんです」。そう言って見上げた空は、海に負けないほど青く澄んでいた。



マリナを出て天草五橋のひとつ「天門橋」の下を通過して島原湾へ。新天門橋を架ける工事の真っ最中だ。



堺武治 (熊本市南区)
1968年熊本県生まれ/1992年
職業訓練大学校建築科卒業後、
株式会社美創に勤務/1993年
有限会社SDA建築設計事務所
入社/1999年一級建築士事務所
堺武治建築事務所設立